

「人生科」教育の立場

——提唱者和田重正氏の人間観に学ぶ——

松 田 高 志

Summary

On the Education of Life Philosophy : Learning from the Advocator, Mr. Shigemasa Wada

Takashi Matsuda

"The education of life philosophy (jinseika-kyoiku)" interlinks the questions "What is man?" and "What is life?" with the question "How should we live?" and without forcing one definite goal for all of us, asks how each one of us should live a better life. The education of life philosophy, therefore, should be open to all kinds of views of life, and remain neutral toward all of them. But, in order to provide an alternative to "moral education" and "religious education," and to offer a better understanding of life, the education of life philosophy necessarily holds its own view of life.

Mr. Wada proposes that we should view our life from the largest possible perspective based on the principle of "loss and gain" rather than of "right and wrong" or "good and evil." The concept of "loss and gain" gives us a more concrete and comprehensible criteria as it enables us to adapt it according to our personal needs than that of "good and evil" which requires a universal standard. The traditional moral or religious education maintains that we should do "good" for the sake of the good even though we might suffer a "loss" from the action, and disregards the principle of "loss and gain." This type of education presupposes the concept that one and the other are separate and different entities. Mr. Wada, on the other hand, thinks that "gain" should be "good" in view of the long-term, wide perspective based on the belief that one and the other are essentially related. In this view, the concept of "loss and gain" is ultimately not incompatible with that of "good and evil."

序

「人生科」は、教育の場において、「人間（自分）とは何か」、又「人生とは何か」について考え、話し合い、教師も生徒もそれぞれに自覚を深めていこうとするものである。従って、皆が同じゴールに到達するとか一つの正しい答えを見い出すことが目的ではなく、それぞれが自分自身の価値観・人生観を深めることが大事なのである。これは、教師も生徒も一人ひとり「哲学すること」であると言ってよいであろう。それは、「人生哲学」とも言えるが、しかしあくまで自分のこととしての「人生哲学」である。ソクラテス・プラトンにおけるように、「魂の世話をすること」、あるいは「自分自身の世話をすること」としての「哲学」である。

このように「哲学すること」は、一人ひとりの「内面」の事柄であるが、しかし他者を必要としないのではなく、むしろ他者との「対話」において自己の「内面」を一層真実なものにするのである。「哲学すること」は、ソクラテス・プラトンにおいてまさに「対話」とは切り離せないものであった。とは言え、確かに教室においてこのような「対話」をすることは難しいとも言えよう。しかし教師の態度如何によって、どこにおいても「対話」が成り立つ可能性はあるのではないだろうか⁽¹⁾。

ところで、人生について「哲学し、対話すること」は、これまでもいろんな所で、又いろんな形で為されてきたであろう。しかし教育の一つの分野として、はっきり位置づけられて為されてきたとは言えない。確かに、道德教育、あるいは宗教教育がそれに近いものであるとも言えるが、しかし少なくとも従来のは、いずれも一定のゴールが定められていて、それを教え、その方向に導こうとするのであって、「人生科」のように各人が自由に「哲学する」こと自体が目的ではなかった。但し「人生科」は、従来のものではない道德教育、あるいは宗教教育になりうるものであると思われる⁽²⁾。

このような「人生科」は、以上からも明らかなように、どのような価値観、人生観にも開かれたものでなければならない。「人生科」は、ニュートラルな立場でなければならないであろう。しかし、これまでの道德教育や宗教教育ではなく、敢えて「人生科」でなければならないと言う以上は、やはりそこに何らかの立場（人間観）がなければならない。それでは、開かれたものでありながら単にニュートラルな立場ではなく、それ以上のポジティブな立場とはどのようなものであろうか。

(一)

「人生科」の提唱者である和田重正氏は次のように述べている。『『自分とは何か』、『どう生きるか』という問題を提げてどのように迫っていくかは、各々の人の見解により、又相手によって異なるとよいと思います。…中略…私は次の二つの前提を用いて問題の深所に道を拓こうとしています。一つは、『因果の理法』、他は、『いのちの知恵』、そうして到るべきところは発展と平和です。個人の生活の堅実な発展と平和ばかりでなく、全人類の平和です。…中略…

一つは、人間とは何であるか—これを存在の面からでなく、実践倫理の面から捉えて、人間はどのような可能性を本来具えているものか、ということに対する一つの見解—それを『いのちの知恵』ということばで表現しているわけです。もう一つは、この現象界がどのような法則によって展開しているのか、殊に『自分を中心にして考えたとき、自分の言動が自分自身にとってどのような意味をもたらすのか』、という問題に対する見解—それを『因果の理法』ということばで表現したいと思います⁽³⁾。」

「人生科」は、種々のやり方があるが、和田重正氏自身は、「因果の理法」と「いのちの知恵」の二つの観点を以て、「問題の深所」に迫ろうとしている。「人間（自分）とは何か」を存在の面からでなく、実践倫理の面から捉えるということは、「人間（自分）とは何か」を常に「（自分は）どう生きるか」と結びつけて考えるということであり、又「（自分は）どう生きるか」を、「人間（自分）とは何か」、つまり「人間はどのような可能性を本来具えているものか」というところまで深めて考えるということである。従って、実践倫理の面で人間が本来具えている可能性を予め決めつけ、限定することなく、その可能性を経験的に虚心に見ていこうとするのである。そこで気づかれる、人間が本来具えているよさが「いのちの知恵」と言われているのである。この傍点のある「いのち」は、和田重正氏独自の概念であるが、人間を含め、森羅万象を貫いているものを意味している。これについては、又後で触れることにしたい。

又、「自分の言動が自分自身にとってどのような意味をもたらすのか」という問題意識を持って、生きていく中での経験的事実を虚心に見つめていくのであるが、そこでは、どのような生き方も、それが因となって必ずそれ相応の結果が生じるという厳しい事実を認め、経験的にどのような因果関係があるかを見ていくのである。これが「因果の理法」と言われている観点である。

いずれも、「人間（自分）とは何か」、「人生とは何か」を自分がどう生きるかという問題と結びつけて、具体的に経験的事実をおさえていくことによって、常識的な思い込みや一人よがりな決めつけを見直すのである。

(二)

上の引用文の中で、「（人生科の）到るべきところは発展と平和です。個人の生活の堅実な発展と平和ばかりでなく、全人類の平和です。」と言われているが、この点についても少し述べておかなければならない。

「人生科」は、単に共同生活をする上で必要とされる生き方を身につけるとか、自律性を養うというだけでなく、それぞれの「発展」がめざされているのである。つまり人間に本来具わっている可能性に気づき、それを発揮することによって「発展」するのである。又、それと共に個人の「平和」だけでなく、「全人類の平和」がめざされている。この「全人類の平和」というのは、大変興味深い点であるが、後で又触れることにしたい。

「人生科」のめざすものとして、別の所で次のように言われている。「自分が幸せになるってことが、自己中心的発想だと思ったら大間違いでね、そういうことじゃないね。本当の幸せ

とは、もっともっと開けたものだ。…中略…皆が幸せの方向に少しでも目を開けてってもらいたいな⁽⁴⁾。』

又、もう少し違う言い方で次のように言われている。「私は、進歩ってのは要するにどういうことかと思っているかという、（言葉にひっかかったらダメなんだけど）喜びの方向に向かって進歩するだろうと思う。より多く喜べるというのが進歩なんだろうと思う。これは、その喜びというのを、非常に狭い相対関係の中で考えると、つまらない話になるけどね。（もっと大きな視野の中で喜びってものを考えると）喜びに向かって少しづつでも進歩する、それが人間の進歩ってものだろうなと思ってるんですね⁽⁵⁾。』

いずれも、実際の「人生科」の中で言われていることであるが、このように「人生科」がめざしているものは、普通道徳教育においてはなかなか言われないものではないだろうか。そこに、「人生科」の立場の一つの特徴があると言ってよいであろう。

以上から、「人生科」の特徴として、生きていく中での経験的事実を虚心に見つめること、特に生き方如何んによってどのような結果が生じるかという因果関係の事実をおさえること、又それと共に、人間に本来具わっている善き可能性を見出し、常識的な思い込みを見直していくこと、そしてそのことを通して「発展と平和」、「本当の幸せ」、「喜びへの進歩」がめざされていると言えるが、これはどのような立場（人間観）に由来しているのであろうか。道徳教育の立場と比較しながら、もう少し具体的に見ていきたい。

（三）

和田重正氏は、「人生科」を実際にやっていく際に、しばしば「ソンかトクか」、「バカかりコウか」という言い方をしている。「トクなことをするのがリコウで、ソンなことをするのがバカなんだ。私もそう思うんだ。その点は同じだ。だが、何がトクか何がソンかはそう簡単にはわからないと思うんだ…中略…われわれはソンとトクをあべこべに思っていることが多い。それは視野が狭いために起こる錯覚なのだ…⁽⁶⁾」

つまりトクと思ってやっても、結局ソンになることをするのがバカであり、逆にソンに見えても、結局トクになることをするのがリコウであるということである。そして当然のことであるが、ここでは、「バカとかりコウというのは脳味噌の出来工合を言うのではないのだ。脳味噌の出来工合はどうであってもみんなリコウになれるのだ。…中略…みんなそういうリコウでいたいものだ。…中略…バカをやめてリコウになろう⁽⁷⁾。』

単純に言えば、これが「人生科」であると言ってもよいであろう。ただ、普通には、損得とか利害得失を考えるのは、現実的、打算的なことであって、処世術でしかないと思われるであろう。道徳教育、況してや宗教教育において、ソンとかトクという言い方は、先ずなされない。損得を計算すること自体、道徳的ではなく、況や宗教的でないと思われるからである。「人生科」は、道徳教育や宗教教育に代りうるものであると既に述べたが、そこにおいてどうしてソンかトクかというような問い方が可能であり、又意味があるのだろうか。

「人生科」は、問題を常に自分のこととして、自分がどう生きるかということと結びつけて

考える故に、できるだけ具体的に、経験に即して考え、語ることが必要である。その意味で、損得の判断は、確かに極めて具体的で分かりやすい。誰もが、四六時中やっていることである。

しかし「人生科」においてソンかトクかという言い方がされるのは、ただ分かりやすいからだけではない。「人生科」において特に大事なものは、各人が自分のうちにある基準、価値観を意識化し、見直すことである。その際、善いか悪いかとか、正しいか正しくないかを考え、話し合うならば、多くの場合、一般的な基準を求める方向に向かうであろう。それに対し、ソンかトクかという問い方は、自分の中にある私的な基準や価値観の問題である。従ってそれは、タテマエの議論ではなく、自分自身の価値観を意識化し、見直す機会になり、「人生科」にふさわしいものであると言ってよいであろう。

とは言え、このような「人生科」がどうして道德教育に代りうるものになるのか、又宗教教育につながるものになるのかは、未だ明らかではない。

和田重正氏は、例えば次のように言っている。「^(あたま)大脳が働いている限り、他人と優劣を争うという感じはなくなる。だからそれはあっていい。あっていいけど、そこから先が難しい。…中略…そういう比較の感じってなくなるけど、それにひっかからないで、すべき事を力一杯やる。…中略…それを実行していくようになったら、将来、一生涯どの位トクになるかわからない。普通じゃ言い表わせないトクになるね⁽⁸⁾。」

要するに、狭い視野でなく、できるだけ広い視野で、あるいは目先のことでなく、できるだけ長い目で見て、「トクになることがよくて、ソンになるのはいけない」のである。基本的に、このような方向でソン・トクが言われている。

ところで和田重正氏は、次のようにも言っている。「短い視野で見たら間違いが起こるんで、どの位の長さで見ると、自分の一生なんて、そんな狭い所で見るとわけじゃないのね。時間的に見たら無限の長さの中でソントク計算していると、私なんかトクのことしかやらない。ヘー、と思うかもしれないけど、時間とか空間なんて我々の描いているイメージで、そんなもの存在しないというのが根本にある。一番の原点てのはそういうことなんで、それをすぐ理解しなさいと言ったって無理だけど⁽⁹⁾。」

又、別のところで次のようにも言っている。「私は損とか得とかいうものは、そもそもないような気がするのです。つまり、私はどんなことでも、損でも得でもないと思うのです。…中略…もちろん、今でも、損をしたとか得をしたとか、全然感じないわけではありません。しかし、今は自分の感じというものは頼りになるものではなくて、損も得もないのが事実であることをよく知っていますので、得したと思っても大して嬉しくはないし、ひどい損をしたと思ってもさほど残念だとも思いません。だから、その点では大へん気楽になりました。『それでは、何をするにも張り合いがないではないか』と思う人があるでしょう。ところが、そうではないのです。損をのがれ、得をつかまえようとする張り合いより、もっともっと張り合いのある目あてがあるのです⁽¹⁰⁾。」

ここで和田重正氏は、「人生は損も得もないと思えるようになって、大変気楽になったが、しかし張り合いがなくなったわけではなく、損・得よりもっと張り合いのある生き方ができる

ようになった」と言っている。ただ、損・得を思わなくなったと言っても、それは道徳的に言って自己中心的でよくないからそうなったというのではない。むしろできるだけ長い目で見て、それも一生どころか「無限の長さの中で」トクなことしかやらないという生き方の一つが、実はソンもトクもないと思える生き方に他ならないのである。

このような「トクなことしかやらない」とか「ソンもトクもない」という生き方は、確かに和田重正氏自身が言っているように、「すぐ理解しなさいと言ったって無理」なものであるが、しかしこのような立場にあるからこそ、ソンかトクかということをしてできるだけ欲張って広い視野で、又長い目で大いに考えたらいいいということがはっきりと言えるのである。

ここで、ソン・トクを「広い視野で」とか「長い目で」考えるという時、それは、「より巧妙な打算」あるいは「拡大された利己性」ではないかという疑問がやはり残るかもしれない。もしそのような疑問が残るならば、ソンかトクかということ自由に語ることはできない。「人生科」においては、これ迄の道徳教育等のものとは違う人間観（「もう一つの人間観⁽¹¹⁾」）が背後になければならないであろう。

(四)

道徳教育において見られる「損得の計算はよくない」という考え方は、「たとえソンなことでも、善いことはすべきである」という考え方と一つに結びついていると思われる。道徳教育においては、単純に言えば、「善いことはソンであってもやるべきであり、悪いことはトクなことでもやるべきではない」という考え方が基本にあると言ってよい。「善行」は、自己犠牲を伴った利他行であるが故に賞賛され、「悪行」は、他人に損をさせ自分だけ得をする故に非難されるのである。

ところで、ここには一つの人間観が隠れた形で前提されているであろう。それは、「自分と他人は別ものであり、個々バラバラの存在である」、つまり「取ったらトク、取られたらソン」という人間観である。ただ、人間は一人では生きていくことはできないので、何らかの仕方ですべて「助け合い」とか「譲り合い」をしなければならないが、それは、自分にとっては「持ち出し」であり、「我慢」である。つまり損なことでもしなければならないし、イヤなことでも受け入れなければならない。その際、それをイヤイヤでなく、進んで「自己犠牲」的に行うことが善いことだというのが、「自分と他人は別ものである」という人間観から出てくる道徳観である。

従って、道徳教育においては、基本的に損得の計算はありえないのであり、「広い視野で」あるいは「長い目で」トクとかソンということも考えられないのである。どこ迄も道徳の純粋性、自己目的性を堅持し、無条件的に守るべきであるというカントの定言命法的な道徳の考え方をするのである。このような「ソンなことでも善いことはすべきである」、「トクなことでも悪いことはしてはならない」という道徳観は、容易にタテマエ論議になり、実生活においてタテマエとホンネを使い分ける生き方になるか、それともごまかさずに生きようとすれば、道徳と「損得を感じる自分」とのギャップに悩み、そのようなギャップのある自分や他人を責めることになる。このような道徳教育は、実生活においてゴマカシが行き詰まりかに追いやること

になるのではないだろうか。

但し、道德教育から離れた所では、実際にはカントのいう仮言命法的な、つまり条件つきのやり方で道德と「損得の計算」のギャップを埋めている場合が多いのである。例えば、他人に好かれるためには、他人に親切な方がいい、あるいは他人に信用してもらうためには、正直である方がいい、というようなことである。これは、まさに損・得を「広い視野で」、「長い目で」考えているということの一例である。このような仮言命法的な考え方、生き方ができるのは、少しでも「人間とは何か」、「人生とは何か」を考えているからである。これは、「処世術」とも言えるが、又広い意味で「人生の知恵」とも言えるであろう。このようなものに関して書かれたものは、「イソップ物語」をはじめ、昔話等「因果応報」物語、現代においてはD. カーネギーの『人を動かす』(Dale Carnegie, “How To Win Friends and Influence People”) 等各種人生論、臨床心理系の啓蒙書等々、枚挙にいとまがない。

それでは、道德教育においてこのような仮言命法的な道德観をどうして教えようとしなのか、もっと教えてよいのではないかという疑問が起こるであろう。これに関しては、少なくとも我が国においては、「治める側」が道德教育を行う場合、それは多くの場合道德を手段化しているのであるが、しかしそれ故にこそ、道德を手段的なものとする仮言命法的な道德観—基本的に自分の都合で守っても守らなくてもよいとする道德観—を教えることはありえないのである。「治める側」は、どうしても「自分の都合によらず守るべき道德」を教えようとするのである。

それに対し、いわば市民的立場からの道德教育であれば、仮言命法的な道德観であっても、それが有効であれば大いに教えてよいであろう。しかしやはり損得を「広い視野で」、「長い目で」見るという立場は、理論的に言って「巧みな打算」、「拡大された利己性」ではないかという疑問を払拭するのが難しいのであろう。道德の真実性を損ねるのではないかという心配が依然として消えないのである。

既に述べたように、道德教育の定言命法的な道德観がそうであったように、それとは反対の仮言命法的な道德観も「自分と他人は別ものである」という人間観に基づいているのである。その点に関し、和田重正氏は次のように述べている。「道德科では、自分と他人は別物だということに出发点がある。人生科では、自分と他人は別ものではないということに出发点があるのです⁽¹²⁾。」

「自分と他人は別ものではない」というのは、少し漠然とした言い方であるが、これについては、次のようにも言われている。「お釈迦様もキリストも、多分そうだろうと思います。道元さんも、盤珪さんも自分の正体をつきつめて行った人は皆、自分の正体は我々の目に見えているような別々なものではない、ということをつきとめているのです。どうも、自分と他人の境はないというのが本当たらしいのです。…中略…境目なし説ならば、一体といえよさそうですが、一体という言葉から受ける感じと少し違うので、言いようがないからこういう言い方をします⁽¹³⁾。」

「境目がない」というのは、又「隔て」がないとか「粹」がない、「仕切り」がないとも言

われる。これはどういうことか、以下において具体的に見ていくことにしたい。

(五)

例えば、他人の世話をするのは、「こちらの労力の持ち出しでソンなことである」という素朴な考え方がある。しかし又逆に、「他人から好かれることになるから、結局トクである」という考え方もある。後者の方は、前に述べたように人間の相互関係というものを視野に入れた考え方であり、より大きな視野から考えている。ここでは、他人の世話をすることは、こちらの労力の持ち出しであり、その点でソンであっても、相手に好かれることになり、又周りの者から評価されることになるから、労力の持ち出しを十分に上回るプラス面があるという計算が成り立つ。もちろん実際には、いちいちそのような計算をするわけではなく、いわば「人生の知恵」としてそうすることが多いであろう。この二つの考え方は、正反対である。しかし、既に述べたようにいずれも「自分と他人は別ものである」という人間観から来ている。

これに対し、他人を世話すること自体、自分にとって喜びであるということも又ありうるであろう。これは、自分の力を発揮できること、しかもそれが他人の役に立つということの喜びである。他人に喜んでもらえることは、嬉しいことである。何かお世話をして、相手の喜ぶ顔を見ると、それだけで嬉しくなる。これは、お世話をする、相手に好かれるからトクであるというような計算ではなく、他人に対し自分がしたことが役に立ち、他人が喜んでくれるのが嬉しいのである。

このような 嬉しい気持ちや満足感が味わえるのは、トクなことだとすれば、これはもはや仮言命法的なトクとは、質的に違ったものではないだろうか。仮言命法であれば、相手も、又相手を世話することも自分がトクするための手段であるとも言えるが、相手に対し自分が役に立ち、相手が喜んでくれることが自分の喜びであるという場合は、相手の喜びと自分の喜びは一つであり、どちらが手段でどちらが目的とは言えない、どちらも目的であり、そういうことがトクなことなのである。ここでは、もはや「自分と他人は別ものだ」という「隔て」は無くなっているとも言えよう。そして実は、「他人をお世話することは、結局自分のためになることである」（「情けは人のためならず」）という仮言命法的生き方も、実際は「相手に対し役に立てたから嬉しい、相手に喜んでもらえるから嬉しい」という生き方に自然になっていくのであり、それと共に自他の「隔て」も無くなっていくのである。

そしてこれは、次の場合更に徹底される。母親は、我が子の世話をして、子どもが喜ぶのを「我が事のように」喜ぶ。この場合、自分が役に立ったから、自分が世話をして子どもが喜んでくれたから嬉しいというよりも、子どもの喜びがそのまま自分の喜びなのである。ご馳走を作って子どもが美味しそうに食べてくれるのも、子どもが遠足から帰って来ていかに楽しかったかを語るのを聞くのも、母親にとっては同じ喜びである。ここには、もはや何の「隔たり」もないと言ってよいであろう。

これは、確かに母子関係において顕著に見られるものであろう。しかし母子関係にだけ見られるものではなく、もっと広がりうるということも事実である。このように他の人の喜びを自

分の喜びとして味わえるというのは、確かにトクなことである。否、そのように自分と他人は別ものではないという自覚から生まれる自由な生き方、そしてその喜びの広がり、深さということから言えば、こんなトクなことはないとも言えよう。これは、既に述べたように「開けたもの」としての本当の幸せ、「大きな視野の中で」の喜びと言われるものである。このような「人間に本来具わっているよき可能性」は、「自分と他人は別ものである」という人間観では説明するのが難しいであろう。このような経験的事実を排除しない開かれた立場として、「自他は別ものではない」という人間観が意味を持ってくるのである。このような人間観であれば、「広い視野で」、「長い目で」見てトクなこと、幸せなことは、「拡大された利己性」であると考えする必要はなく、又ソン・トクを言っても道德の真実性を貶めることにはならない。むしろ道德の真実性を無理なく認めることになるのである。

(六)

ところで、「自分と他人は別ものである」という人間観においては、先に述べたように容易にホンネとタテマエの二元論になりやすい。それに対し、「自他は別ものではない」という人間観ではどういうことになるだろうか。和田重正氏は次のように言っている。「親子ばかりじゃなくて、誰とでもお互い同士が、一つじゃないけど、別々じゃないんだという関係を感じとるのは大事なことなんだ。…中略…ところが、子どもの立場って、大体それを感じとってないね。親がどんなに心配しようと思っても、それはそれだという感じがどこかにあるんだ。どうしてそうなのかっていうと、やっぱり自己中心的感じが強いからだね。人間というものは外側はそういうふうにできているから、しょうがないけれど、その外側がだんだん希薄になっていくのが、人間的成長ということで、人間の成長はそういう所に表われて来る。自我の殻というか、自己中心的なものが、だんだん薄れていって、ほかとの関連が感じ取れるってことが大事なんでね⁽¹⁴⁾。」

ここで、「自我の殻」あるいは「自己中心的なもの」は、人間的に成長するにつれてだんだん薄れて、自分と他人が別々じゃないという関連が感じ取れるようになっていっているが、普通は「自己中心的なもの」、つまりホンネと言われるものは、内側にあり、成長するにつれ抑えることはできても、薄れていくものとは考えられていない。それに対し、ここでは「殻」であり、「外側」にあると言われているのが興味深い。つまり「タテマエ」は、自分の外にあるが、「ホンネ」も又自分の「外側」にあるということである。とすれば、自分の内側、つまり「親子ばかりじゃなくて、誰とでもお互い同士が、一つじゃないけど、別々じゃないんだという関連を感じとる」ものは何であろうか。それは、いろいろな言い方がされているが、例えば「まごころ」であると言われている。

「(まごころは) 本当にあるのでしょうか。それとも修養が何かしているうちに出来るのでしょうか。これは大問題ですが、私はあるのだと思っています。…中略…生まれつきまごころのない人間なんかありませんが、それが表に出ているか出ていないかによって、外から見ると、あるように見えたり、ないように見えたりするだけです。みんな生まれつき心臓を持っている

のと同じに完全なまごころを持っているのですが、だんだん利口ぶったケチな根性を習い覚えて、それでまごころの上を塗りつぶして来たので、それが外に向かって活動しにくくなっただけです。本当は腹の中ではまごころがムズムズしているのです。腹に手を当ててみればわかるでしょう⁽¹⁵⁾。」

自分と他人は別ものではないと感じ、そのように行動しようとするのが、「まごころ」であるとするれば、それを発揮しにくくしているのは、無自覚から来る自己中心的なものであり、又習い覚えた「ケチな根性」である。それは、しかしいずれも自分の外側にあるものであり、自覚を深めることによって、それが外側にあるものであると気づき、それにとらわれなくなるにつれて、その外側のもの、「殻」は薄れていくのである。これが、人間的成長と言われているものである。単に肉体的成長ではなく、内面的、自覚的な面での成長である。

「まごころ」と言われるものは、又「本心」とか「本気」とも言われている。ともかくそれは、ホンネ（自己中心的なもの）の一層内側にあるものである。このことは、「自分と他人が別ものでない」という「もう一つの間人観」の中に含まれている大事な見方である。普通「まごころ」と言われるものと「タテマエ」と言われるものが内容的に似ているので、ホンネとタテマエの二元論の見方において「まごころ」は無視されがちであるが、経験的事実をしっかりと受けとめることによって、ホンネの一層内側にあるものとして「まごころ」を認めることができるのである。我が子の喜びが、我が事のように感じられる母親のその喜びは、「まごころ」の喜びであり、「自己中心的なもの」、「ケチな根性」の及ばない深い喜びである。

(七)

ここで残っているもう一つの問題は、このような間人観において、善悪はどのように見られているかということである。

和田重正氏は、次のように言っている。「(善いこと、悪いことは) ある流れに沿っているか、沿っていないかということだなと思っているんですね。その流れというのはどういうものかと言うと、ちょっと言いようがないけれど、私は『いのちの流れ』と言っている。いのちの流れ、大きな大きなこの宇宙がはじまって以来、ある方向に流れている。その流れに逆らうのは悪いんで、それに沿うというのはよいということだ⁽¹⁶⁾。」

「いのちの流れに沿う」という言い方は、自分がいのち（の流れ）とは別のものであるかのようにあるが、しかし文意から言っても当然自分も又いのちの中に含まれているのである。そのことは、次の文章からも明らかである。「ここで善悪の問題になると、(悪とは) その(いのちの流れの) 全体の調和を破ることなんだろうなあと思う。部分部分みたらわからないです。何がいいんだか悪いんだか。部分部分をとってみたらねえ、片一方にいい事はもう片一方に悪いし、そういうめんどろな、計算上のいろんなことが起こってくるけど、だけど、その善悪っていうのを部分的にみるんじゃなくて、大きな全体の中でみると一目瞭然なんですね。疑問になることなんにもない⁽¹⁷⁾。」

「いのちの流れ」は、比喩的な表現ではあるが、一つの形而上学的な見方である。従って、

このような見方を前面に出して議論するということはできないであろう。しかし「人生科」の立場が、「いのちの流れ」ということでなくても、全体の調和、それも考えうる限りの全体、生成発展していくダイナミックな全体の調和が善であり、そうでないのが悪であるという見方であれば、道德教育のように個々の徳目を基準として判断することなく、むしろ自由に、例えばソ・ン・トクということを考え、話し合っても、善悪の眞実性を貶しめるという心配はないであろう。つまりできるだけ広い視野で、又長い目で見て、全体（の発展）に調和することがトクであるということは、理解できることであり、又それが善であるということも、善悪の眞実性を失わせることにならないであろう。

又特に、「いのちの流れ」に沿うことが善いことだという見方をすれば、善いことをすること自体、心身共清々して気持ちがいいという経験的事実も理解することができよう。例えば、「正直」とか「親切」というものが徳目として善悪の基準になるならば、それは概念化し、型とか枠になり、自分を縛るものになる。しかしそれに対し、「正直」とか「親切」が、「いのちの流れ」のあらわれであると思えば、自分を縛るものとしてでなく、心身にとって清々して気持ちのいいものとして体験しうるのである。「正直」とか「親切」が、それ自体道德的基準になるのではなく、「いのちの流れ」のリアリティを味わいつつ生きる生き方の一つの手懸かりとして受けとめられるならば、そのことによって、かえって道德の眞実性が深く自覚されることになるだろう。

既に明らかなように、「自分と他人は別ものではない」という人間観も、この「いのちの流れ」の見方に由来している。従って、「もっともっと開けたもの」としての本当の幸せを求めるとか、「大きな視野の中で」の喜びに向かって進歩するということも、このような見方からすれば一層理解しやすいものになるであろう。更に、ここから言えば、「個人の生活の堅実な発展と平和ばかりでなく、全人類の（発展と）平和」という「人生科」の目的も理解しうるであろう。普通には、「全人類の（発展と）平和」というのは、必ずしも分かりやすいものではないが、「いのちの流れ」の方向と必然性を少しでも経験的に実感し、自覚しうるならば、受け入れやすいものとなるのではないだろうか。

(八)

開かれたものである「人生科」が、単にニュートラルな立場というのではなく、生き生きした、実り多いものになる立場として、提唱者と田重正氏においては「自分と他人は別ものではない」という人間観、更には「いのちの流れ」という大きな見方があることを見てきた。これは、もちろん誰もがすぐに認めることができるような立場ではないであろう。しかし従来の道德教育や宗教教育に代わるものとして「人生科」を進めていこうとするならば、やはりこのような立場が大きな意味を持っているということはいえよう。

もちろんこのような立場でなくても、「人間（自分）とは何か」、「人生とは何か」を自分のこととして自由に「哲学し、対話しうる」ような「人生科」を進めていくことができる立場であればよいのである。但しそういう立場を見出し、深めていくには、やはり以上に述べた人

間観や見方が一つの有力な手懸かりになるのではないだろうか。そして、「人生科」を進めていく立場、人間観や見方は、又当然「人生科」において実際に「哲学し、対話する」場合の重要な手懸かりになるということも言えるであろう。

註

- (1) 拙稿『「人生科」教育の可能性』（『教育人間学の根本問題』燈影舎、所収）参照。
- (2) 前掲書参照。
- (3) 和田重正、『人間のための教育（増補版）』（柏樹社）136頁～141頁。
- (4) 和田重正、『自分を生きる 人生科Ⅰ』（くだけ社）112・113頁。
- (5) 前掲書、130頁。
- (6) 和田重正、『あしかび全集 第五巻』（柏樹社）73頁。
- (7) 和田重正、『おとなになる 人生科Ⅱ』197・198頁。
- (8) 『自分を生きる 人生科Ⅰ』27・28頁。
- (9) 前掲書、40頁。
- (10) 『あしかび全集 第二巻』229・230頁。
- (11) 和田重正氏の主著の書名、地湧社刊。
- (12) 『自分を生きる 人生科Ⅰ』11頁。
- (13) 前掲書、12頁。
- (14) 前掲書、111・112頁。
- (15) 『あしかび全集 第三巻』43頁。
- (16) 『自分を生きる 人生科Ⅰ』132頁。
- (17) 前掲書、136頁。

（原稿受理 2000年10月2日）